

新米講師の気象学講義

1. はじめに

筆者は1995年3月、気象庁を定年退職し、4月から大阪府堺市にあるプール学院短期大学に非常勤講師として採用され、気象学を担当した。このほど今年度の講義を無事終了したので、その経過などを報告し、諸先輩のご指導・ご助言などを賜りたく、本欄に投稿したものである。

2. プール学院と気象台

文科系の女子短大で気象学を講義しているところは数少ないと思われるので、最初に、プール学院と気象台との関係を述べておこう。

プール学院は、その創立が大阪管区気象台の前身・府立大阪測候所の創立より3年早い1879年(明治12)で、短期大学の開設も、新学制発足と同時の1950年(昭和25)という歴史と伝統のある学院である。短大開設時は大阪市生野区勝山に所在しており、そこが大阪管区気象台の近隣だったこともあって、当時の管区台長・大谷東平氏が気象学を講義することになったようである。大谷氏が1963年(昭和38)に気象研究所長として転出した後は、後任の管区台長・間野浩氏が後を継いだ。間野氏は1968年(昭和43)に退職されたが、気象台がその年に東区(現在の中央区)に移転したので、間野氏が退職後も引き続き講師を続け、一方、短大も1982年(昭和57)に泉北ニュータウン槇塚台の現所在地に移転し、学院と気象台との直接の関係はなくなった。しかし、間野氏が高齢のため引退された1985年(昭和60)からは、元潮岬測候所長の三宅昇氏が後を継いで気象学の講義を続けられ、その三宅氏も今春高齢のため引退され、筆者が4人目の講師として後を継ぐことになったのである。

3. 講義の概要

プール学院短大は、英文科と秘書科があって、学生数は全体で1100名位のようなのである。気象学は、一般教

育科目の「自然の分野」5科目のうちの1つである。学生は、2年の間に自然の分野から最少1科目を選択し、更に人文・社会・自然の分野から最少1~2科目選択し、履修することになっている。

気象学を受講する学生は、毎年300名前後いるそうだが、今年度は265名が選択した(外に聴講生3名がいた)。英文・秘書両科、1・2年生の混成で、最多95名、最少39名の4クラス編成であった。1時限90分、週1回、半期で2単位というものであった。

筆者は、講義の目的として、「気象情報を正しく利用するには気象知識が必要であり、特に台風や低気圧・前線など気象擾乱の性質を理解しておくことは、天気予報を有効に利用するだけでなく、気象災害から身を守るためにも大切である」として、大気現象の理解と、気象情報の利用に重点をおいた。

講義内容は

1. 気象学と気象事業の歴史
2. 気象学の基礎(1) 大気と気圧
3. 気象学の基礎(2) 気温
4. 気象学の基礎(3) 風
5. 気象学の基礎(4) 雲と雨
6. 高気圧・低気圧と前線
7. 梅雨
8. 台風
9. 雷・たつまき
10. 天気図と天気予報
11. 生活気象
12. 気候とその変化
13. 自然災害とその予防

とし、テキストは宮沢清治氏の「天気図と気象の本」を採用した。これは前任の三宅氏が使っていたからということだけでなく、筆者の講義目的に適合し、値段も安かったからである。参考図書としては小倉義光氏の新著「お天気科学」を指定した。これは高度な内容を平易に解説しているので、学生にはこの程度は読んでほしいという筆者の願望である。実際の講義にあたっては、「気象の事典」などの外、小倉氏の「一般気

象学」, 気象学会の「教養の気象学」, 松本誠一氏の「新総観気象学」, 島田守家氏の「やさしい気象教室」などを参考にさせていただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

短大の講義では, 出席をとる必要がある。しかし, 90名もの名前を読み上げていたのでは時間がかかってしまう。そこで出席カードに名前を書かせてそれを集めることにしたが, そこに「ひとこと」欄を設け, 感想・意見・質問などを書かせ, 学生とのコミュニケーションを図った。これは新米の講師にとって非常に役に立った。学生の要望に応じて, 毎回レジュメを配布して講義に集中させるとか, 講義の冒頭にその日の新聞天気図と衛星画像を示して天気解説を行うとか, 月毎に質問をまとめて答えたりしたことは, 学生に評判が良かったようである。

講義で苦労したことは, 話をする題材が多いので, いかに内容を絞るかということであった。いつも時間に追われている感じで, 途中休憩を狭んだり, 軽い話題で眠気を覚ましたりする余裕はなかった。これは来年度の課題であろう。

成績の評価は, 三宅氏の示唆もあって, テストではなく, レポートの提出とした。テーマは「天気予報における天気図の有用性について」とした。学生は難しいなどと不満気だったが, 提出されたレポートを読むと, 講義やテキストのまとめだけでなく, いろいろな参考書を自分で調べてまとめたものも多く, 期待以上の出来だった。ある学生は, 最後の感想で「レポートの題材は, 習ったこと全てにかかわるもので, 自分の知識を整理する上で, とてもよい出題の仕方だったと思います」と書いたように, 筆者の講義の中心部分をなすものであった。

4. 学生による講義の評価

当初265名いた受講生は, 最終的にレポートを提出したのは259名で, 6名が途中脱落したことになる。内2名は最初からほとんど出席していないので, 実質4名の脱落だが, これが多いのか少ないのかどう評価すべきだろうか。

最後の講義が終わったとき, 出席した学生全員に, 気象学を学んだ感想を書いてもらった。これはいわば学生による講義=講師への評価である。レポートは提出済みで, しかも期末試験直前の講義だったためか, 出席率が悪く, 全体で176通しか集まらなかったのは少々残念だったが, 後ろにその内容を紹介する。特に

質問項目を設けたのではなく, 平文を適当に分類し, 複数回答としているものも少なくないが, 大体の傾向はつかめるものと思われる。

A. 気象学の講義は全体としてどうだったか

①受講して良かった	41
②生活に役立ちそう	35
③面白かった	20
④難しかった	7
⑤つまらなかった	3

大多数の学生には好評だったようである。「つまらなかった」という3名の内容は, 「高校の地学で学んだことの復習だ」「話を聞いているだけだった」「言葉の説明が多かった」というものであった。後ろ2者は屋外に出たり, 天気図を描いたりしたかったようだが, 多数の受講者がいる講義では無理であろう。高校地学の復習だと評価されたのは少々ショックである。そこで中学・高校時代の気象の勉強と比較していた感想を抜き出して見ると, 次のようになっている。

B. 中学・高校時代の気象の勉強と比べてどうか

①内容が濃かった	10
②知識を伸ばせた	9
③難しかった	2
④復習に過ぎない	1

22名が触れた中で, 高校の復習だと評価したのは1名だけだったので少し安堵した。この学生は高校時代にかなり高度な勉強をしていたものと思われる。

全体の評価について, 少し内容に立ち入ってみると, 次のようにまとめられる。

C. 気象学の講義を受けてどう変わったか

①気象の知識が身についた	38
②新聞・TVの気象情報に関心が深まった	30
③気象など自然現象に関心が深まった	19
④気象が生活に密着していることが分かった	14
⑤天気図が読めるようになった	10
⑥今後の生活に役立てたいと思う	8
⑦気象は奥が深いことが分かった	4

(以下略)

以上のように, 新米講師としてはまずまずの評価とほっとしているところである。

5. おわりに

気象学受講の感想の外に, 講師への希望・意見・批判なども求めており, なるほどと思うものについては, 来年度取り入れていくつもりである。そして, はじめ

に述べたように、先輩諸氏のご意見も伺い、より良い気象学講義にしたいと考えている。

(プール学院短期大学 富田 正夫)



気象庁技術報告第115号「平成5年冷夏・長雨調査報告」

平成5年(1993年)の夏期は全国的に顕著な低温・多雨・寡照となった。6～8月の3か月間の平均気温は平年よりも1～2℃低く、特に北日本の太平洋側では2～2.5℃低かった。このような低温は戦後最も著しい冷夏であった昭和29年(1954年)に匹敵し、また梅雨明けはこれまでの基準では特定できないほどの長雨となった。

このような特異な天候は日常生活はもとより各種の産業に著しい影響を及ぼしたが、とりわけ水稻を中心とした農業被害は甚大であった。水稻の全国作況指数は74と戦後最悪の不作となり、米の緊急輸入など国の基本政策に大きな影響を及ぼした。

この報告書は主として6～8月の西日本における長雨・寡照と7～9月の北日本と東日本における低温・

寡照の気象状況を詳しく記述している。第1章「天候の概要」では天候経過、極東域の天候、気温・降水・日照の特異性、主な冷夏・長雨年との天候の比較、気温・降水・日照の地域特性が述べられている。また、第2章「被害状況」では農作物の被害状況が地方別に記載されている。

平成5年の冷夏のように人が一生の間に1回しか経験しないような特異な天候に対し、それを事前に予測すること、また被害を予測しそれに対して十全な予防措置を講ずることは我々の理想とするところであるが、現状ではその期待に応えられていない。

この報告書が冷夏の大気現象としての理解を深め、農業被害の防止、軽減のために活用されることを期待したい。
(産業気象課)